

經濟論叢

第七十四卷 第五號

- レーニンの市場理論について……………田 中 眞 晴 (1)
- 封建地代とブルジョア的發展……………山 田 浩 之 (19)
- 攝河棉作地帯における農民の動向……………脇 田 修 (35)
- 阿波藩における葉藍專賣制度の成立過程…大 槻 弘 (58)
- マルクスの「經濟學批判體系」と
レーニンの「帝國主義論」……………吉 信 肅 (80)
- 最高入先出法の批判的考察……………高 寺 貞 男 (97)
-

[昭和二十九年十一月]

京都大學經濟學會

封建地代とブルジョアの發展

——マルクス「資本制地代の發生史」との關連において——

山田 浩之

一 地代形態推轉の意義

いつたい、封建地代が支配しているところでは、ブルジョアの發展はあり得ないのであらうか。あるいは、封建地代の支配が終つた後に、ブルジョアの發展が始まるのであらうか。言うまでもなく、否である。

資本主義は封建社會の崩壞の後に形成されるのではない。資本主義形成へのブルジョアの發展は封建社會の胎内で發芽し、それに對立しつつ成長してゆく、と考へらるべきであらう。とすれば、資本主義形成の問題は封建社會における資本主義の發芽——ブルジョアの發展から理解されねばならない。封建社會の胎内で、つまり、封建地代の支配しているところで、ブルジョアの發展がすでに開始しているとすれば、それは封建社會のどういう構造に基づいてゐるのであるか。これがこの小稿でわたしが何ほどか明らかにしたいと考へる設問である。

この點について、マルクスの地代形態推轉の分析——資本論第三部第四七章「資本制地代の發生史」——はこのような問題を明らかにするための重要な暗示を與えている¹⁾。したがつて、マルクスの敘述を手がかりにして考へて

ゆこう。

さて、農業における資本主義の成立過程は資本制地代の成立過程として取扱われうるのであるが、そのばあい、マルクスが「資本制地代の發生史」で分析している地代形態の推轉過程——勞働地代・生産物地代・貨幣地代の形態轉化過程——は封建社會の内部から發出するブルジョア的發展の發展過程を示すものと考えてよいであろうか。このことをまずはつきりしておかねばならないが、このためには、地代形態の推轉が何に基づいて生ずるのかを明らかにしなければならぬ。これについて、二つの點が考慮されう。第一の點は社會的生産力の發展である。マルクスは次のように書いてゐる。

「賦役勞働の立脚點は勞働のあらゆる社會的生産諸力の未發展性であり、勞働樣式そのものの粗雜性である」（資本論第三部第七章「資本制地代の發生史」第二節勞働地代・青木文庫譯①一一一八頁・以下本章よりの引用は節と頁數のみを示す）。

「生産物地代は、直接的生産者のより高い文化狀態を、つまり、彼の勞働・および社會一般・のより高い發展段階を内蔵する」（生産物地代・一一一九—二〇頁）。

「勞働の社會的生産力の一定の發展なしにはこうした轉形がいかに完遂されがたいかは、ローマ帝政のもとで失敗したこうした轉形の種々なる試みにより、この地代のうち少くとも國稅として實存する部分を一般的に貨幣地代に轉形させようとしたが現物地代に逆戻りしたことによつて、證明される。こうした移行困難は、たとえば、革命前にフランスでは貨幣地代が從來の諸形態の殘滓によつて混和、混合されていたことを見ればわかる」（貨幣地代・一二三—四頁）。

このように、各地代形態はそれぞれ社會的生産力の一定の發展段階に照應するものである。つまり、地代形態の推轉は社會的生産力の一定の發展によつてはじめて生じうる。

第二の點は商品經濟の發展である。この點に關して、マルクスは次のように言つてゐる。

「その純粹性におけるこの生産物地代は、さらに發展した生産諸様式および生産諸關係にも斷片的に根を踐しうるとはいえ、相變らず自然經濟を、すなわち、經營諸條件の全部または大部分が經營そのもので生みだされるということを、前提とする」(生産物地代・一二〇—一頁)。

「まず散在的に行われ、ついでは多かれ少かれ國民的規模で行われる生産物地代の貨幣地代への轉形は、商業、都市工業、商品生産一般の、したがつて貨幣流通の、一そう著しい發展を前提とする」(貨幣地代・一二三頁)。

引用文から明らかなように、現物(勞働・生産物)地代の貨幣地代への推轉は商品經濟の一定の發展を前提とする。自然經濟から商品經濟への發展なくして、現物地代から貨幣地代への推轉は行われえない。したがつて、地代形態の推轉は社會的生産力と商品經濟——勿論、兩者は相互媒介的に發展する——の一定の發展にもとづいてのみ行われる、と言ふことができる。

しかしながら、ここで注意すべきことは、地代の形態轉化はならぬ地代——マルクスが本源的地代形態とよび、吾々が封建地代とよび慣わしているもの——の本質を變化させるものでないことである。このことをマルクスは次のようにのべている。

「勞働地代の生産物地代への轉形は、經濟學的にいえば、地代の本質をならぬ變化させない。地代の本質は、ここで考察する諸形態では、地代は剩餘價值または剩餘生産物の唯一の支配的で正常的な形態だという點にある」(生産物地代・一一一九頁)。「その純粹な形態では、この地代は、勞働地代および生産物地代と同じく、利潤をこえる何らの超過分も表示しない」(貨幣地代・一二四頁)。

これから明らかなように、地代形態の推轉過程は、社會的生産力と商品經濟の發展に基づいて生ずるとはいえ、封建地代の本質の變化として現われるのではない。むしろ、それは社會的生産力と商品經濟の發展とを封建的搾取關

係のなかに包攝し、吸収するものと考えるべきであらう。

したがつて、地代形態の推轉をひきおこす限りでは、社會的生産力と商品經濟の發展は封建地代收取の仕方の變化、すなわち、封建的土地所有の内部構造の變化をひきおこしているにすぎない。逆に、それらの發展によつてひきおこされた封建的土地所有の構造轉換が地代形態の推轉として表現されている、と言つてもよいであらう。それゆゑ、地代形態の推轉過程そのものはブルジョアの發展の發展過程を示すものでなく、封建的土地所有の構造轉換の過程を示すものである。その意味で、各地代形態は封建社會の發展・崩壞の段階を示す指標であり、その段階における封建社會の内部構造の凝集の表現である、と言ふことができる。

しかし、このことは封建地代の支配しているかぎり、封建社會の内部にブルジョアの發展がおこなわれないことを意味するのではない。ブルジョアの發展は封建社會の内部から發出しているのであつて、したがつて封建社會の内部においてすでにブルジョアの發展と封建的諸關係とが相對抗して存在しているわけである。そしてそのばあい、封建地代が支配しているということは、後者が支配的な地位にあることを意味しているのである。

以上から明らかにように、地代形態の推轉過程、自體の分析によつては、封建社會の内部から發出するブルジョアの發展は明らかにならない。逆に、封建地代に對立する別の要因が指摘されねばならないのである。

(1) 第四章「資本制地代の發生史」は、封建地代の本質把握という問題と資本制地代の發生史という問題の二つの問題をふくんでいる。わたしがここでとりあげようとするのは主として後者である。ただし、必ずしも後者の忠實な紹介ではない。

二 封建社會の基本矛盾

封建的諸關係とブルジョアの發展との對抗關係が何に基づいて生ずるかを明らかにすることから始めよう。そのためには、封建的經濟構造の分析から始めねばならない。

ある社會經濟構造の一番奥の祕密は「生産諸條件の所有者と直接的生産者との直接的關係」(勞働地代・一一一五頁)にみいだされる。そして、この關係に基づいて「不拂剩餘勞働が直接的生産者から汲みだされる獨自的な經濟形態」(同上)が與えられる。封建社會の最も端緒的な勞働地代段階について、マルクスはこの關係を敘述の冒頭において次のように表現している。「勞働地代のばあいには、直接的生産者が週の一部分では、事實的または法律的に彼に屬する勞働用具をもつて、事實的に彼に屬する土地を耕し、週の残りの日を地主の領地で地主のために無償で勞働する」(勞働地代・一一二頁)と。この關係が封建地代の汲みだされる基礎である。この基礎は、勞働地代が生産物地代・貨幣地代に轉形しても、本質的な變化はない。¹⁾

さて、地主と農民とのこの關係で最も重要なことは、直接的生産者たる農民が事實上彼に屬する土地で農耕に従事することである。このことは、直接的生産者を土地に二重の仕方で關連させることを意味する。

第一に、このことによつて、直接的生産者は「自分の勞働の實現のため及び自分の生活維持手段の生産のために必要な勞働條件」の「占有者」²⁾「事實上の所有者」として現れる(勞働地代・一一一三四頁參照)。したがつて、ここでは直接的生産者と生産手段との直接的結合が行われている。そして、直接的生産者が土地を占有することが自分自身の勞働の生産物を所有するための條件であり、彼はつねに自分の生活資料を自分自身で獨立に個別分立し

た勞働者として自分の家族とともに生産しなければならない(分益經營と農民的分割地所有・一二三六頁參照)。つまり、彼は小經營という生産様式に基づいて「自分の農耕、ならびに、これと結びついた農村・家庭的工業を自立して營む」(勞働地代・一二一四頁)。ここに、封建的生產様式の基底たる「小農民經營」*kleine Bauernwirtschaft* が與えられる。³⁾

第二に、直接的生産者が土地の事實上の所有者であることは、彼が土地の完全な所有權をもたないことを意味する。すなわち、直接的生産者が土地の事實上の所有者——*Interigentiner* であるかぎりにおいて、地主はその土地の名目上の所有者——*Obergentiner* として現われる。したがつてここでは、所有權が身分の上下に應じて上級と下級に階層づけられ、分割されている。そして、土地所有權のこのような身分的分割が封建的土地所有の基本内容⁴⁾をなしている。封建社會におけるこの土地所有關係を「身分的土地所有」とよぼう。そこでは、地主は、名目上の土地所有者であるといへ上級所有權者として、彼の土地を「他人によつて所有されている——直接的生産者に對して自立化し土地所有者において人格化された——勞働條件」(生産物地代・一二一九頁)として直接的生産者に對置せしめることができるのである。したがつて、直接的生産者は土地に對して自分のものとして關係することができず、地主に人格化されたものとして、地主との支配隷屬關係に入るによつてのみ關係することができる。すなわち、土地に對する物的な支配の關係が人間に對する人格的な支配の關係に轉化される。かくして、彼は土地の附屬物として土地に緊縛されざるを得ない。したがつて、直接的生産者は身分的土地所有に基づく封建的な支配隷屬關係における非自由者として存在することになる。

以上みたように、直接的生産者が生産手段の事實上の所有者であることは、一方で、彼に小農民經營を可能なら

しめると同時に、他方で、彼は身分的土地所有に基づく支配隷屬關係において人格的に隷屬せしめられることを意味する。ところで、直接的生産者の土地に對するこのような關係の仕方によつて、封建的經濟構造が構成され、地主による封建地代の搾取の基礎條件が與えられることになる。すなわち、こうである。

直接的生産者は事實上の土地所有者として小農民經營をいとなむ。すなわち、彼は自營農民 *selfsustaining serf* として自立して、勞働し、生産しているが、この「自立性」*Selbständigkeit*こそ封建的生產様式を特徴づけるものである。この自立性をもつた農民の生産（小農民經營による自立的生産）を「自立的農民生産」とよぶならば、以上から明らかなように、「自立的農民生産」は封建的經濟構造の一つの側面をなしている。

ところで、このように農民は自營農民として、「自立的農民生産」を営んでいるから、農民自身の勞働力の再生産は商品交換に入りこまない。それゆえ、その剩餘勞働の徵收も商品交換＝價值法則によつて媒介されえない。したがつて、地主による封建地代の徵收は「經濟外的強制」によつてのみ可能となる。「經濟外的強制」は「身分的土地所有」に基づく支配隷屬關係によつて必然化される。つまり、地主は「身分的土地所有」に基づいて經濟外的強制を行使し、剩餘勞働を徵收するわけである。このような意味において、「身分的土地所有」は、「勞働力の所有者をして、彼自身の不可欠的欲望の充足に必要な程度以上に、この勞働力を使い、働かせることを餘儀なくさせる所有關係」（勞働地代・一二六頁）として、封建的土地所有の根幹となつている。したがつて、「身分的土地所有」は封建地代收取の基礎であつて、封建的經濟構造のもう一つの側面を形成している。

かくのごとく、封建制經濟の基本構造はこの二つの側面によつて構成される。兩者はたがいに他を前提し、相互依存の關係にあること以上の如くであるが、同時に、二者鬭争的な關係にある。というのは次の如くだからである。

まず、農民の事實上所有している土地の上で、營まれる自立的農民生産は、その自立性によつて、自己の勞働力の生産性を高めるための主體的な契機を有している。すなわち、地主のための封建地代の高さは「規律と秩序」によつて固定化し、不變量となつてゆく傾向があるのに反して、直接的生産者自身が自由にしうる勞働日の生産性は、可變量であり、彼の經驗の進歩によつて、彼のおぼえた新しい欲望・彼の生産物のための市場の擴大・彼が自分の勞働力を自由にしうる保證の増大・等々によつて、みづから發展する可能性を與えられている（勞働地代・一一八—一九頁參照）。したがつて、勞働地代の下でさえ、農奴の側に「財産および富の自立的發展が生じうる」（勞働地代・一一七頁）。そして、農民の側におけるこのような勞働生産性の發展は必然的に農民生産の自立性を増大せしめる。この自立性の増大とともに、農民は「事實上の土地所有」を前進せしめ、そのことによつて、彼は自分自身を解放する可能性をつくりだしてくる。このことは、自立的農民生産が農民の土地占有權の強化によつて身分的土地所有を廢棄する方向に歩むことを意味する。したがつて、自立的農民生産の發展は身分的土地所有の否定として現われてくる。

しかし、身分的土地所有はこのような自立的農民生産の發展に對する制限である。地主は身分的土地所有に基づく經濟外的強制によつて農民から封建地代を搾取する。そして、この地代は先にみたように「剩餘勞働の唯一の支配的で正常的な形態」として表われるのであつて、農民の全剩餘勞働の吸收を志向している。したがつて、身分的土地所有の論理は自立的農民生産をして農民の必要勞働部分にとどまらしめるべく貫かれ、かくして、それは農民生産に自立性を與えつつ、その自立性の發展を抑止しようとする。このように、「自立的農民生産」と「身分的土地所有」はたがいに依存しつつ、矛盾するのであり、それゆゑ、封建的經濟構造は兩者の二者鬭爭的性格を含む統一

體として現われるのである。

かくして、「自立的農民生産」と「身分的土地所有」は封建的經濟構造の基本矛盾の相對立する二つの基本的側面を形成することになる。すなわち、兩者の對立が封建社會の基本矛盾にはかならない。このような封建社會の基本矛盾を資本制社會における「生産の社會的性質と占有の私的性質との矛盾」に對應させて表現するならば、その矛盾は「生産の自立的性質と所有の身分的性質との矛盾」と言いうるであらう。

以上のごとき封建社會の基本矛盾に基づいて、封建的諸關係とブルジョア的發展との對抗關係が生ずるのであるが、この對抗關係はどのような形で具體化されるのであらうか。ここで、わたしは「萌芽的利潤」という要因を指摘しなければならぬ。

農民の側に富の自立的發展ないしは勞働生産性の向上が生ずると、農民のもとには地主への地代部分と農民の必要勞働部分との總和以上にでる超過分が生ずる。そのばあい、封建的諸關係が不變で、地代が固定されているならば、農民の手元に自己の勞働力の再生産に必要な勞賃部分をこえる超過分——マルクスはこれを「資本制生産様式の下では利潤として現象するものの萌芽」ないしは「萌芽的利潤」*embryonischer Profit* とよんでいる——が生ずることになる。このばあいには、農民は「萌芽的利潤」によつて自分自身の狀態を改善し、富裕になり、生産力を發展せしめ、そうすることによつて自立性の増大を招くことができるであらう。

しかし、萌芽的利潤の生成は封建地代によつて制限される。封建地代が「剩餘勞働の唯一の支配的で正常的な形態」であるというのも、封建地代が萌芽的利潤の制限として現われることを意味する。換言すれば、封建地代が存在することは、萌芽的利潤の存在が否定されることを意味するのではなく、封建地代が萌芽的利潤の大きさのみな

らずその定在さへをも規定するものとして現われることを意味しているのである。この點について、マルクスは次のように語っている。

「地代はこのばあいには、剩餘勞働の正當な・いつさいを吸収する・いわば正當な・形態であつて、利潤をこえる超過分だなどとはとんでもないことであり、かかる利潤の大きさのみならず定在すらも、その他の事情が同等ならば、地代・すなわち所有者のために強制的に提供されるべき剩餘勞働・の大きさに依存する」（勞働地代・一一一七頁）。

「利潤が——誤つた先走りではあるが、必要勞働をこえる彼の勞働の超過分のうち彼自身が取得する分數部分を利潤と名づけるならば——生産物地代を規定するのではなく、利潤はむしろ生産物地代の背後で成長するのであり、利潤の自然的限界は生産物地代の大きさにある」（生産物地代・一一二二頁）。

「利潤が事實的に超過勞働の一特殊の部分として貨幣地代のほかに發生するかぎりでは、貨幣地代は、從來の諸形態での地代と同じく、なお常に、この萌芽的利潤——これは、自己の超過勞働のであるか他人の勞働であるかを問わず、貨幣地代で表示される剩餘勞働を給付した後になお餘る勞働の搾取可能性に比例してのみ發展しうる——の正常的制限である」（貨幣地代・一二四頁）。

このように、萌芽的利潤は封建地代によつて規定されている。とはいえ、右の引用文は萌芽的利潤が封建地代の對立者として、封建地代の背後に現れてくることをも示している。

この對立は、生産力の發展によつて地主の地代部分と農民の必要勞働部分の總和をこえる超過分が生じたばあいに、はつきりした形をとる。けだし、この超過分は農民と地主によつて互いに爭奪されあうからである。それが農民の手に歸するばあいには、萌芽的利潤として現象し、自立的農民生産を發展させ、封建地代の基礎をほりくずす方向に向う。地主の手に落ちるならば、封建地代に吸収されることになり、封建的諸關係の強化をもたらす。そし

て、農民が萌芽的利潤を獲得する可能性をもっているのは彼が土地の事實上の所有者として自立的農民生産を行っているからであり、この超過分を地主が封建地代として収奪できるのは彼が身分的土地所有に基づく經濟外的強制を行使できるからであることを考えるならば、自立的農民生産と身分的土地所有との矛盾が「萌芽的利潤」と「封建地代」との對立となつて表われていることは明白である。したがつて、封建社會の基本矛盾は「萌芽的利潤」と「封建地代」との對立として表現される、と言ふことができるであらう。そして、このことによつて、封建社會における地主と農民との對立が、封建社會の基本矛盾の階級的表現であることも明らかとなるであらう。

(1) マルクスは貨幣地代についても同じことを言つてゐる。「この種の地代の基礎は、解體に向つてゐるとはいへ、出發點をなす生産物地代のばあいと同一不變である。直接的生産者は、從來どおり相續またはその他の傳統による土地の占有者であつて、彼のこの最重要生産條件の所有者としての地主にたいし、餘分の強制労働、すなわち等價なしに爲される不拂労働を、貨幣に轉形された剩餘生産物の形態で支拂わねばならない」(貨幣地代・一一三頁)。

(2) 封建社會においては「占有」Beit is 「事實上の所有」である。マルクスは「私有」と「自由な私有」とを區別する(資本論第一部第二章・青木文庫譯④一一五七頁參照)。「占有」は「私有」の一形態であつて、「貢納義務ある所有」として表われるものである。「農奴でさえも、自分の家に附屬する零細地の所有者―貢納義務ある所有者だといへ―であつたばかりでなく、共同地の共有者でもあつたということを、忘れてはならぬ」(同上・一〇九八頁注一九一・なお傍點はマルクス)。

(3) 資本論第一部第一章・青木文庫譯③五六〇―一頁注二四、および同上・二四章④一〇九八頁・注一九二參照。なお、小農民經營は労働地代段階では極めて制限をうけた形で存在するにすぎないが、生産物地代段階ではより發展した形態をとり、貨幣地代段階では分解を始めると考えることができよう。小農民經營の最も正常的な形態は分割地所有である(ハダ益經營と農民の分割地所有・一一三六頁參照)。

(4) レーニンこれを「土地所有の身分性」と言っている。「農民という言葉は使わない!—この注目すべき表現は、土地所有の身分性(『わがロシアにあるすべての法律』)をこわそうとしており、最低の身分、農民身分という名そのものを根こそぎにしようとのぞんでいる農民の『胸のそこ』からはとばしりてたものである」(レーニン『一九〇五—一九〇七年のロシア第一革命における社會民主黨の農業綱領』朝野勉譯・青木書店・二一五頁、傍點引用者)。

(5) マルクスの次の言葉を参照されたい。「これ(封建農民—引用者)を奴隸經營または植栽地經營から區別づけるものは、奴隸はこのばあい他人の生産條件をもつて勞働し、自立しては勞働しないということである」(勞働地代・一一一四頁)。

(6) ただし、かかる「自立的農民生産」は村落共同體的組織によつて支えられていることを忘れてはならない。このことは自立的農民生産の最も完成せる形態である分割地所有においても妥當する。すなわち、マルクスは「共同所有地——これはどこでも分割地經營の第二の補足をなす」(分益經營と農民的分割地所有・一一三六—三七頁)と言っている。

三 封建社會におけるブルジョアの發展の出發點

前節で、萌芽的利潤が封建地代(封建的諸關係の集約的表現)の對立者として登場してくることが明らかとなつた。われわれは、封建社會におけるブルジョアの發展を問題としうる點に到達したのである。

農民の生産力の發展の成果が農民の手に萌芽的利潤をのこすばあいには、農民はそれによつて自己の自立性を増大することができるのは先に見た通りである。この生産力の發展に基づく自立性の増大が地代形態推轉の基礎をなしている。たとえば、生産物地代になると「直接的生産者は、直接的強制の代りに諸關係の力により、鞭の代りに法律の規定によつて驅りたてられ、自分自身の責任のもとで剩餘勞働をしなければならぬ」(生産物地代・一一二〇頁)。

そして、「直接的生産者は自分の全労働時間を多かれ少かれ自由に処分する」(同上)ことができる。したがって、労働地代から生産物地代への推轉は、自然經濟の支配下における、隷屬農民の自立性の増大としての意味をもつてゐる(レーニン『ロシアにおける資本主義の發展』レーニン全集第三卷・大月書店・一六六頁参照)。

このような農民の自立性の増大を基盤として、農民の手元に残つてゐる萌芽的利潤は他人のそれとの交換におけることになる。エンゲルスが、「彼ら(農民—引用者)が商品を生産するようになつたのは、自分の必要以上の、そしてまた封建的領主に支拂うべき現物税以上の、ある剩餘を生産するようになつてからのことであつた。つまり、この剩餘が社會的交換になげられ、賣りにだされて、商品になつたのである。」(『反デューリング論』マル・エン選集・大月書店・四六三頁)と書いてゐるごとく、農民の商品生産は萌芽的利潤として現象した餘剩生産物の商品化から出發する。ここに農民的商品經濟成立の端緒がある。萌芽的利潤から出發した農民的商品經濟は、生産力の發展に基づく社會的分業の展開によつて、漸次擴大してゆく。農民の餘剩生産物の商品化は市場目當ての生産へと發展する。彼は小商品生産者となり、小營業者となる。商品經濟のこのような進展が現物地代の貨幣地代への推轉の前提である。つまり、貨幣地代の成立は農民の商品經濟の展開によつてはじめて可能となる。

そのばあい、貨幣地代の國民的な規模での成立は「諸生産物の市場價格を、および、諸生産物が多かれ少かれはば價值どおりに賣られることを——從來の諸形態のもとではそんなことは決して必要でない——前提とする」(貨幣地代・一一二—一二三頁)。また、貨幣地代の成立とともに、直接的生産者の「生産物の一部分はいまや商品に轉形——商品として生産——されねばならぬ。だから全生産様式の性格が多かれ少かれ變化される。全生産様式が、社會的關連からの獨立性・離脫性を失う。生産費——これには今や多かれ少かれ貨幣支出が入りこむ——の關係が決定的

となる」(同上)。すなわち、價值法則が貫徹し、新しい再生産機構が形成されはじめる。農民の自立性は孤立性にまで發展する。農民たちは他人から獨立して經營を営み、一人一人が個々別々に「市場」との關係に入るようになる(レーニン『いわゆる市場問題について』レーニン全集第一卷・大月書店・二〇一頁參照)。農民的商品經濟は、このようにして、發展し、こういう形をとつて、ブルジョア的發展を押し進めてゆく。

ところで、萌芽的利潤を基點とするこのような商品經濟の展開、價值法則の貫徹は、封建的經濟構造を根底からほりくずすものであるだけに、たえず封建領主の經濟外的強制によつて抑壓され、制限される。領主は經濟外的強制によつて地代水準を高め、萌芽的利潤を自己に吸収し、農民のブルジョア的發展を否定しようとする。そのみではない。領主はさらに進んで、生産物地代の商品化に基づく商品經濟を展開し、農民的商品經濟に領主的商品經濟を對抗せしめ、時には農民の隸屬化を強めて賦役勞働に基づく領主直營の強化ないしはそれへの逆轉の道を歩む。ここに商品經濟の進展における二つの型の對立がみられるのであるが、農民が自己の商品經濟を積極的に展開してゆくためには、彼は、その展開を妨げている諸制限——封建的諸關係——とくに經濟外的強制——に、價值法則が貫徹してゆくための諸條件——「經濟的自由」を對抗せしめねばならなかつた。かくして、萌芽的利潤から出發する農民的商品經濟は、「經濟的自由」の實現を要求する眞のブルジョア的發展として、封建的諸關係を排除しつつ、成長してゆくとする。

萌芽的利潤は商品經濟展開への展望を與えるにとどまらない。萌芽的利潤はすべての農民に一樣に生ずるとは限らないのである。このことは、地代形態が發展し、農民の自立性が増大するにしたがつてはつきりと現われてくる。生産物地代段階では勞働地代段階に比べて、農民が萌芽的利潤を獲得するより大きな可能性が與えられている。「そ

れと同様に、この地代形態とともに、個々の直接的生産者たちの經濟狀態における從來よりも大きな區別が生ずるのである。少くともそうした可能性が、そしてこの直接的生産者がみずから再び他人の勞働を直接的に搾取する手段を獲得したという可能性が、定在する（生産物地代・一二二頁）。このような「農民層の階層分化」は自然經濟から商品經濟への發展とともに明確となつてくる。レーニンは言つてゐる、「こうして、まだ現物經濟が支配してゐるときでも、隷屬農民の自立性が擴大しはじめると、はやくも彼らの分解の萌芽が現われる。しかし、これらの萌芽が發展しうるのは、ただつぎのような地代の形態のもとで、すなわち現物地代の形態の單なる變化である貨幣地代のもとだけである」と。すなわち、「現物地代の貨幣地代への轉形は、さらに、無一物であつて貨幣で雇われる日雇勞働者階級の形成によつて、必然的に同伴されるばかりでなく先行されさへする。だから、この新たな階級がまだ散在的に登場するにすぎぬその成立期の間に、よりよい地位にある地代支拂義務を負う農民たちのもとでは、……自己の計算で農業的賃勞働者を搾取する習慣が必然的に發展した」（貨幣地代・一二五頁）。このようにして、「農民層の分解」が決定的になり、それに基づいて、勞働力が商品化されてくる。

このようにして展開されてくる「商品經濟」と「農民層の分解」こそ、國內市場形成の基本的契機であり、したがつて資本制經濟成立の基礎條件である。そして、以上から明らかなように、「商品經濟」にせよ、「農民層の分解」にせよ、それらが何らかの問題となるばあいに、それらに先行する要因として「萌芽的利潤」が指摘されねばならないのである。それゆゑ、「萌芽的利潤」は、「經濟的自由」を實現し、封建地代の基礎をほりくずすブルジョア的發展の初發的起動力である、と言ふことができよう。

貨幣地代が確立された場合には、そこで生ずる萌芽的利潤はより積極的な役割を演ずる。この段階では、地代は

一定の貨幣量として固定される傾向が強く、さらに、貨幣價值の下落によつて地代率が低下する傾向があるために、萌芽的利潤生成の可能性は以前の諸形態よりも大きくなるのであるが、そればかりではない。ここでは、萌芽的利潤は貨幣形態で蓄積される。したがつて、ここにおいて、「人民的富」*Volksreichum* の形成が可能となり、それとともに、封建地代範疇止揚の條件が與えられるのである。したがつて、貨幣地代のもとにおける萌芽的利潤の生成は封建地代範疇の止揚を可能にする。貨幣地代が封建地代の解體の形態であると言われるのも、このような意味においてである。

封建地代範疇の止揚によつて、封建的諸關係はうちくたかれ、「經濟的自由」が實現される。そして、この過程において、資本關係が形成されてゆくわけであるが、この過程の分析についてはあらためて問題とされねばならぬであろう。本稿は、この過程に結果してゆくブルジョアの發展の最初の出發點の解明である。

- (1) レーニン『ロシアにおける資本主義の發展』レーニン全集第三卷・大月書店・一六六—七頁。なお、レーニンが「資本制地代の發生史」の章からえた最も重要な思想は「農民層の分解」ということであつた。レーニンは言つてゐる、「農業資本主義の成立過程の純理論的な分析が小生産者の分解をこの過程の重要な要因として指摘していることは、きわめて教訓的である。われわれが念頭においてゐるのは、資本論第三卷のもつとも興味ぶかい章の一つ、第四十章『資本主義地代の發生史』のことである」(同上・一六六頁)と。なお、レーニン『カール・マルクス』・資本論青木文庫譯④五三—四頁を参照されたい。

- (3) レーニン『いわゆる市場問題について』、同『ロシアにおける資本主義の發展』を参照。

〔一九五四年四月二〇日〕